進脩塾創設三十周年記念

素読のすすめ

王伯厚先生纂

三字経

公益財団法人 忍郷友会

進脩塾塾頭　田代敬二

「素読のすすめ　三字経」

令和二年十二月に三十周年を迎えました進脩塾の事業活動を記念して、茲に「素読のすすめ　三字経」を発行することを関係者各位とご一緒にお祝いしたいと思います。

今回の資料は、故田代敬二会員の遺稿に基づくもので、これからの教本となるものであり、青少年への教材として活用して参る所存です。

しかし、該事業における立役者であり、偉大な先達でありました田代敬二会員を失いましたことは、当会にとり甚大な損失であると同時に慚愧に耐えないものであり、本事業の画龍点睛を欠くとの想いです。

紙面を拝借して衷心よりご冥福をお祈りいたします。

公益財団法人忍郷友会は、平成二十六年四月一日に公益財団法人の認可を受け、新たな歩みを始めており、公益事業の柱である進脩塾事業は、行田市の一般市民及び青少年を対象としてその活動を浸透させて参りました。

一灯照偶の思いで実践可能な事業推進し、できることを着実に展開して参ることは不変であります。

申すまでもなく、当会事業には、これからも皆様のご支援ご鞭撻が不可欠でありますので、よろしくお願い申し上げ挨拶といたします。

令和三年六月五日

公益財団法人　忍郷友会会長　**松 平 忠 昌**

進脩塾開設について趣意書

「子曰く、吾れ嘗て終日食わず、
終日寝ねず、以て思う。益無し。
学ぶに如かざるなり。」

日本の現在を「哲学を持たぬ時代」と呼ぶ人が居ります。開闢以来いまだ経験したことのない「敗戦」という冷厳な現実を与へられて以来の四十年、窮乏、高度成長、低成長不況、世界進出、国際化と激動の中の現実にふりまわされてしまって、それに対処する一貫の原理をもたずに、ここまで来てしまったのが現況ではないでしょうか。一見すばらしい成果を収め得たかのように見えても、それは哲学を持たぬ政治であり、哲学を持たぬ経済であり、哲学を持たぬ教育であったのであるから、それには根の無い草花のように一貫した生命がなく、時運の流転と共に誤算を生じ、破綻を来して、今やその後遺症が社会の各所に噴出して来ているように見えます。

私達は今、「哲学をもたぬ時代」を脱し、まず「哲学を持つ人」とならねばならぬ時にあることを実感するものです。一九九〇年代は心の時代と言われ、心の豊かさを求める声の大なるものがありますが、本当の心の豊かさを求める為には、つぎはぎの学問や知識ではなく、人類五千年の歴史の中からその英知を尋ね、古典に学ぶことが必要かと信じます。

茲に多数の優秀な人材を輩出した忍藩の藩校「進脩館」に倣い、郷土に真の人材が育成される事を願って「進脩塾」の開設を提案するものであります。

平成二年十二月八日

発起人
清水孝男

藩校教育を現代に活かす
忍藩（行田市）三つの教育の場の推移

忍郷友会理事・進脩塾主幹　田代 敬二

一．民間教育の場・古典講座「進脩塾」設立

バブル絶頂期にあった昭和六十年代初頭、日本社会は各所に精神文化の凋落を露呈しつつあった。憂慮すべき風潮の中で、隣接する吹上町に有志の手により東洋思想講座が開講した。招かれて参加した我々は、そこで始めて「大学」に接し、長年に亘って頭の中をしめていた迷妄が一度に晴れる思いがした。参加した同志の中には当時の行田商工会議所会頭清水孝男氏の姿があった。十数回、同講座に通ううち会頭が「街づくりは人づくりからだ。人づくりは我づくりだ。この修己治人の勉強塾を行田市にも作ろうじゃないか」と提案されたので早速行田市における古典講座開講の動きが活発化した。塾の名称・会場・時間など審議が進む中、松下村塾の絵図面を持ち込んだメンバーが居り、彼はこう言った。「松下村塾に学べを合言葉にして呼びかけて見てはどうだろうか」。迂闊にも私はこの話に乗り、㈶忍郷友会の理事会の折計画を提案した。この時、忍郷友会第三代会長（忍藩主第十五代当主）松平忠晃公はこれを聞き「松下村塾は長州でしょう。ここには進脩館がありますよ。それを言うなら進脩館に学べではありませんか」と申された。この一言が決め手となり、名称は忍藩藩校「進脩館」から二字を頂いて進脩塾とした。行田商工会議所会頭清水孝男氏が発起人となって、進脩塾開設についての趣意書が起草され、塾生を募った。平成二年十二月二日、同憂同好の志二十余名が集まって、記念すべき第一回講座が開かれたのである。学ぶところは四書五経の中「大学」、講師は郷学研修所（昭和全期を通じて一世の師表天下の木鐸と仰がれた安岡正篤先生創設）所長柳橋由雄先生、会場は行田市商工センター。毎月第四土曜日の夜を定例講座とし、爾来今日まで二十四年間、開催した講座数は一九〇回を超える。内容も「大学」「中庸」「論語」と続き、半ばにして講師の柳橋先生は卒せられたが、後は荒井桂先生に引き継がれた。現在は「孟子」及び「講孟劄記」を教材とし、単なる知識吸収ばかりでなく〝修己治人・順徳強化〟の学問として講ぜられ、且つ実践すべく聴講が続いている。毎回三十余名の受講者があり、講義の模様は行田ケーブルテレビに集録され毎月数回にわたって放映されている。

二．公民共催の場・忍藩子ども塾素読教室

切っ掛けとなった漢字文化講演会

平成十三年度より㈶忍郷友会は、漢字文化振興会と連携して市民公開講座「漢字文化講演会」を年一回開くようになった。演題としては／漢詩の魅力／漢字の成り立ち／論語入門／埼玉の漢字／白楽天の老後／おもしろ漢字ワールド／漢字の面白さ再発見／芳川波山の漢詩／栄光の忍藩校教育／論語に学ぶ家族のあり方／などなどが講じられた中で、昔、寺子屋をやっていた市内の旧家の方から、当時使用していた教本「三字経」の提供を受けたことがあった。この発見を機に〝寺子屋で何を学んだか〟をテーマに「三字経を読む」と題した市民公開講座を開く事になったが、講演会の効果をより高めたいと考え、次の様な段取りで寺子屋風景を演出し実行した。（1）先ず、市内有力幼稚園に出向き、趣旨を説明して充分な理解を得た上で、素読の体験学習を行なわせてもらうことにした。（2）父兄には「素読とは何か／その効用と体験学習のすすめ」と記載したチラシを配布。（3）チラシの呼びかけに応じて集まった八名の希望者（園児）に対して（4）一日二十分。漢詩・論語の素読体験学習を八日間にわたって行った。

こうした準備を重ねた上で「三字経」講座の日を迎えた。講座に先立ってのぞんだ素読発表を観た父兄来場者は全員涙し、会場は感動の嵐に巻きこまれ、称賛の拍手が鳴り止まなかった。

しかし、誰よりも感激し、素読というものの快感を味わったのは園児たち自身であったと思われる。子どもたちに、体験学習の終わりを告げた時、八名の園児たちは口ぐちに、「もっとやりたい、もっとやりたい」と叫んだのだった。

この子どもたちの声に押されて、進脩塾素読教室が開かれることになった。会場としては忍藩校に縁の深い忍城址公園内行田市郷土博物館を市長の理解と協賛を得て解放してもらうことが決った。そして平成十七年四月より、毎月第一、第二、第三土曜日を定例開催と定め、午前中八名の子どもたちの朗々たる論語・漢詩素読の声が響きわたるようになったのである。

忍藩子ども塾素読教室へと改称

平成二十三年度より「進脩塾素読教室」は市の推進する子ども大学の施策と合致するところから市教育委員会との共催事業となり、塾生募集を教育委員会が行ない、指導は㈶忍郷友会が担当する形となり、名称を「忍藩子ども塾素読教室と改称した。このことは、塾生募集の点で大変有効に働き、それまでの五年間は毎年数名の入塾者に過ぎなかったものがこの年から、一挙に二十余名の入塾生を数えるに至っている。現在は、初級組、中級一組、中級二組、上級組の四クラスがあり、五名の指導員（いづれも㈶忍郷友会々員）が指導に当っている。昨年より、中級一組～二組の指導にはいづれも今は中学生となった第一期生、第二期生が一部担当するようになり「兄弟相共に学ぶ」の塾風が育ちつゝあることは喜ばしい限りである。

天眼寺親子素読教室

他にも㈶忍郷友会では（東京都台東区谷中に在る）忍藩主松平家の墓所天眼寺の協賛を得て同寺の壇信徒（※松平家旧家臣が多数）及びその縁者の方々に回状を廻わして希望者を募り平成二十四年度より「天眼寺（論語・漢詩）親子素読教室」を開講している。

三．公教育の場・行田市立埼玉小学校の素読教室

さいたま県名発祥の地行田市埼玉地区は、古代、中世、近世の史蹟、伝説、史話など貴重な伝承文化の息づく地域である。

市立埼玉小学校はその中程に位置し、幾多の俊秀を輩出した伝統ある学校である。その第二十七代、長原順子校長は、忍藩子ども塾の動勢を伝え聞き、朝の読書の時間帯をいかして素読教室ができないものかと考えた。

㈶忍郷友会ならびに忍藩子ども塾と学校側三者で相談・協議の結果スタートしたのが埼玉小学校素読教室である。平成二十四年六月より忍藩子ども塾から二名の指導員が出向し、毎週水曜日、朝八時十分から二十分間論語、漢詩の素読が始まった。六年生二クラスを皮切りに～一年生までを六週間かけて一巡し、これを繰返すこととなった。僅か二十分間であるが、指導員、担任教師、児童、三位一体となって声を張り上げての素読は、朝の爽快感を伴い予期した以上の成果を上げている。翌春、長原校長は転任されたが、同女子の積極果敢な素読教室への挑戦は、後任の井沢一博校長に引き継がれ、毎週水曜日の早朝には校内の隅々に朗唱の声がこだましている。

論語・漢詩・小学生公開素読教室

市立埼玉小学校の課外素読教室の成果を試される機会は思いもかけず早く訪れた。第十二回全国藩校サミット行田大会である。同大会の行事プログラムに忍藩子ども塾と埼玉小学校児童参加による合同素読教室が組み込まれることになった。これを受けて急遽リハーサルが行なわれた。

平成二十六年五月十八日、行田市産業文化会館において、小学生公開素読教室が市内十六小学校関係者（児童・父兄・教育関係者）を前に盛大に挙行された。

舞台上には忍藩子ども塾生四十余名埼玉小児童百余名が上がり、合同で論語、漢詩を斉唱する壮快な姿があった。

〝一粒の麦実りて明日を呼ぶ〟

平成十七年二月、市内幼稚園の一室で、八名の園児による体験学習から始まった素読教室は「もっとやりたい、もっとやりたい」という園児の声に押されて開講したものである。五年後には行政の理解協力を得て、五十余名という素読教室に成長し、更に四年を経た後には公教育の場に採用されるまでになった。今般、百六十余名による公開素読教室の開催という事実（一石）はその波紋が市内十六校にまで広がろうとしている。

今回特筆すべきは、公開素読教室並に藩校サミットにおける合同素読教室において、声高らかに朗唱を指導しているのが、あの幼なかった園児の成長した姿であるという事である。正に〝一粒の麦、実りて明日を呼ぶ〟の感懐を覚えることしきりなものがある。

最後に、一般社団法人漢字文化振興協会々長石川忠久先生が、この忍領の子どもたちに為に作詩された「忍城偶城」を記して結語としたい。

忍城偶成　岳堂／三百諸侯　美風を競う／進脩の名古し武州の中／児童齋唱す先賢の句／看る可し　郷黌化育の功

参考　その他の活動

一．論語かるた取り大会
　H19・20・21年

二．漢文検定試験
　H22・23・24・25年

三．忍藩藩儒の顕彰講座
　①芳川波山の生涯と詩業　H21年
　②近藤棠軒先生の「宋名臣言行録」
　　H24年
　③第二回　〃　「宋名臣言行録」
　　H25年

四．素読教本「論語」「漢詩」発刊

五．素読教本「古事記」発刊と素読会

第十二回全国藩校サミット行田大会冊子より

素読について

江戸時代、幼童たちの入門期にもっぱら行われた学習法が「素読」でありました。「素読」は対象とする書物の意味や内容は考えず、ただ文字を追ってひたすら音読をくり返すのである。そこで「すよみ」「そよみ」ともいいます。もちろん意味、内容は問わないとは言っても学習者はあてずっぽうながら意味は考えるし、後日、おのずから理解するようになることが期待されます。そこで古語にも「読書百遍、義おのずからあらわる」とあるように、すっかり覚えるようになるまで、くり返し読むのである。ただ声を出して読むというのではなく、リズムと独特の調子を伴った読み方で幼童を魅了したものでした。

このため素読の文体にも工夫が必要で、天保年間に出版された山本蕉逸（しょういつ）の「童子通（どうじつう）」には「素読は語路すなおに覚えやすく、注釈を見ずとも度々読むうちには十に一つもうすうすと義理（意味）のわかるようにあらせたきものなり。それにはなるたけ訓を勝たせて読むべきなり」と親切にさとしております。

江戸期に素読が何の抵抗もなく、むしろよろこんで幼童たちに受け入れられたのは漢文のもつ口調のおもしろさと、耳にこころよい響きによるところが大きい。これは歴代の間に訓読文に工夫が施され、語意とリズム感が一致するまでに洗練された産物を物語っている。また幼童は本来記憶力や知識力が旺盛だから、そこには覚えることの楽しさが自然に伴っていたのであり、教育的意味は大きい。またそのころ覚えたことは生涯忘れることがない。しかも意味は加齢とともに深化され、文字通り血となり肉となるものです。

「素読のすすめ」の著者でキルケゴールの研究者安達忠夫氏はその著のなかで「頭で理解した意味などというものは陽炎のようにあやふやで、いざというとき当てにならない。早急に意味をもとめようとせず、ことばそのものを、できれば全体を、くり返し自分の心に刻みつけておけばこそ、やがて深く根をおろし、生きたことばに育っていくのではなかろうか」と説いています。

早稲田大学名誉教授　村山吉廣 著
「初学入門」より抜萃

原文

人之初、性本善
性相近、習相遠
苟不教、性乃遷
教之道、貴以専

人の生をうけたそのはじめ、人の性はもともと善である。本性なるものは相似かよっているものの習慣によって遠く隔ってしまう。
もし教之導かなければ善なる性も変ってしまう。教之の道は、専一にすることを貴ぶものである。

人の初め性本善 性相近し 習ひ相遠し
苟くも教へずんば性乃ち遷る
教への道は専らを以て貴ぶ

昔孟母 擇レ鄰レ處
子不レ学 断レ機杼
竇燕山 有レ義方
教レ五子 名俱揚

昔、孟子の母は、孟子のために住居を三度移したという、はじめ家が墓に近かったので孟子は幼いころ葬式のまねをして遊んでいた。そこで市場の近くに越すと、今度は商売のまねをするようになってしまった。今度は学校のそばに引っ越すと、孟子は祭礼や礼儀のまねをするようになった。そこでやっと住居を定めたという。孟子が学ぶのを怠ると機(はた)の杼を壊したという。

昔孟母 鄰を択びて処る
子学ばずは機杼を断つ
竇燕山 義方有り五子を
教へて名俱に揚る

竇燕山＝竇禹鈞。五代末の人。は人として守るべき正しい規範、子弟教育の正道を五人の子（儀、儼、侃、秭、僖）に教へ子たちは、父親の厳格な教育によって、のちに相次いで科挙の試験に合格して大いに名をあげ、「竇氏五龍」と称された。

養不教父之過
教不嚴師之惰
子不学非所宜
幼不学老何為

養ひて教へざるは父の過ちなり
教へて厳ならざるは師の惰りなり
子として学ばざるは宜しき所に非ず
幼にして学ばざれば老いて何をか為さん

子供であって学ばないのは、よろしいことではない。幼くして学ばなければ、老いて何ができようか。

玉不琢不成器
人不学不知義
為人子方少時
親師友習禮儀

玉琢かざれば器を成さず
人学ばざれば義を知らず
人の子と為りては少き時に方りて
師友に親しみ礼儀を習へ

天然の美質を持つ玉も磨かなければ、器物としての役に立たない優れた素質を持つ人も学ばなければ、道理がわからない。『礼記』学記に見える言葉。
人の子たる者、若い時にあっては、よい師につき、朋友に交わり、礼儀を習わなくてはいけない。

香九齢能温席
孝於親所当執
融四歳能讓梨
弟於長宜先知

香は九齢にして能く席を温む
親に孝あるは当に執るべき所なり
融は四歳にして能く梨を讓る
長に弟あるは宜しく先づ知るべし

「香は」人名。黄香。後漢の人。九歳で母を失い、父親に孝養をつくし、「天下無双、江夏の黄童」と称された。彼は夏には扇いで親の席を涼しくし、冬は身を以て親の席を温めたと言われる。
親に孝であることは当然、執り守るべきことである。漢の孔融は四歳にして兄に梨を譲ることができたという。年長者に従順であることは、先ず知らねばならない。
孔融（153～208）後漢の学者。建安七子の一人。

首孝弟次見聞
知某数識某文
一而十十而百
百而千千而萬

孝弟を首とし次に見聞
某の数を知り某の文を識る
一よりして十十よりして百
百よりして千千よりして万

②孝弟＝親に孝を尽くすこと。年長者に従順であること。孝と弟を第一とし、次に見聞をひろめ、それぞれの数とそれぞれの文とを学んでゆく。
一から十、十から百、百から千、千から万に及ぶ。

三才者 天地人
三光者 日月星
三綱者 君臣義
父子親 夫婦順

三才とは 天地人
三光とは 日月星
三綱とは 君臣の義
父子の親 夫婦の順なり

三才とは天地人、三光とは、日月星である。
三綱とは、君臣の義、父子の親愛、夫婦の和順をいう。
○義＝君主が臣下を礼をもって遇し、臣下が忠を尽くすことをいう○親＝父が子を慈しみ子は父に孝を尽くすことをいう。

曰春夏 曰秋冬
此四時 運不窮
曰南北 曰西東
此四方 應乎中

曰はく春夏 曰はく秋冬
此の四時 運りて窮まらず
曰はく南北 曰はく西東
此の四方 中に応ず

春夏秋冬、この四時はめぐって窮まることがない
南北、西東、この四方は、中央に対応している。

曰水火 木金土
此五行本乎数
曰仁義禮智信
此五常不容紊

曰はく水火木金土
此の五行は数に本づく
曰はく仁義礼智信
此の五常は容に紊るべからず

五行＝万物を生成する五つの元素
水火木金土、この五行は、数に基づいている。
五常＝人が常に行わなければならない五つの道
仁義礼智信この五常は、人として乱してはならない。

稲粱菽 麥黍稷
此六穀 人所食
馬牛羊 雞犬豕
此六畜 人所飼

稲粱菽 麦黍稷
此の六穀は人の食ふ所
馬牛羊 鶏犬豕
此の六畜は人の飼ふ所

○稲＝いね ○粱＝あわ ○菽＝まめ ○麦＝むぎ ○黍＝もちきび ○稷＝うるちきび、この六穀は、人が食べるものである。
○豕＝ぶた
馬、牛、羊、鶏、犬、豕、この六畜は人が飼うものである。

曰喜怒 曰哀懼
愛悪欲 七情具
匏土革 木石金
絲與竹 乃八音

曰はく喜怒 曰はく哀懼
愛悪欲 七情具わる
匏土革 木石金
糸竹 乃ち八音

喜、怒、哀、懼、愛、悪、欲、人にはこの七情がそなわっている。
匏、土、革、木、石、金、とは八種類の楽器である。
○匏＝ひさごで作った笙などの楽器 ○土＝土を焼いて作った楽器 ○革＝革を張った楽器（鼓など） ○木＝木製の楽器 ○石＝石で作った楽器 ○金＝金属で作った鐘などの楽器 ○糸＝琴などの弦楽器 ○竹＝笛などの楽器。

高曾祖 父而身
身而子 子而孫
自子孫 至玄曾
乃九族 人之倫

高曾祖父よりして身
身よりして子子よりして孫
子孫より玄曾に至る
乃ち九族 人の倫なり

祖父の祖父、祖父、父、我が身、子、孫、ひ孫、やしやごは九族であり、人の世代の順である。

父子恩夫婦従
兄則友弟則恭
長幼序友與朋
君則敬臣則忠
此十義人所同

父子は恩 夫婦は従
兄は則ち友 弟は則ち恭
長幼序あり友と朋と
君は則ち敬 臣は則ち忠
此の十義は人の同じくする所なり

父子の恩愛、夫婦の和順、兄は慈しみ深く、弟は恭しく、年長者と年少の者の間には順序があり、友には信をもって交わり、朋には誼(したしみ)をもって接し、君は敬、臣は忠(誠意、誠心)を尽くす。この十義は人が同じく守るべきものである。

凡訓蒙須講究
詳訓詁明句読
為学者必有初
小学終至四書

凡そ蒙に訓ふるは須らく講求すべし
訓詁を詳かにし句読を明らかにす
学を為す者は必ず初め有り
小学終りて四書に至れ

学問をするには必ず初めがある。『小学』が終了してから四書に至るのである。

○小学＝書名 ○四書＝『大学』『中庸』『論語』『孟子』

論語者二十篇
群弟子記善言
孟子者七篇止
講道徳説仁義

論語は二十篇
群弟子善言を記す
孟子は七篇にして止む
道徳を講じ仁義を説く

『論語』は二十篇。孔子の多くの弟子たちが道にかなったよい言葉を記したものである。学而・為政・八佾・里仁・公冶長・雍也・述而・泰伯・子罕・郷党・先進・顔淵・子路・憲問・衛霊公・季氏・陽貨・微子・子張・堯曰・の二十篇。
『孟子』は七篇。道徳と仁義を説いている。○『孟子』は、梁恵王・公孫丑・滕文公・離婁・万章・告子・尽心の七篇よりなる。

作中庸子思筆
中不偏庸不易
作大学乃曾子
自修齊至平治

中庸を作るは子思の筆
中は偏らず庸は易らず
大学を作るは乃ち曾子
修斉より平治に至る

中庸を作ったのは子思（孔子の孫）。その説くところは中正でかたよることがなく、とこしへに変ることがない。
『大学』を作ったのは曾子。身を修め、家をととのえることから天下を平定し国家を治めるに至る八条目を説いている。「大学」は、学問はなんのためにするかを述べた書で、その条目として、格物・致知・誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下の八つを挙げている。

孝経通ジ 四書熟ス
如キ六経ノ始テ可シ読ム
詩書易 礼春秋ハ
号ス六経ト当ニ講求ス

孝経に通じ 四書熟し
六経のごとく始めて読むべし
詩 書 易 礼 春 秋は
六経と号す 当に講求すべし

『孝経』をくわしく知り、四書を熟読して、はじめて六経を読むべきである。
○孝経＝書名。孔子と曾子の問答の形で孝について説いた書。
『詩経』『書経』『易経』『周礼』『礼記』『春秋』は六経という。よく研究し考之求めなければならない。

有リ連山 有リ帰蔵
有リテ周易 三易詳ラカナリ
有リ典謨 有リ訓誥
有リ誓命 書之奥ナリ

連山有り帰蔵有り
周易有りて三易詳らかなり
典謨有り 訓誥有り
誓命有り 書の奥なり

連山があり、帰蔵があり、周易があって、この三易において易はつまびらかにされている。
○連山＝夏の時代の易の名。○帰蔵＝殷の時代の易の名。○周易＝周代の易の名。
典謨があり、訓誥があり、誓命がある。これが『書経』の奥義である。
○典、謨、訓、誥、誓、命＝書経の文体の名。

我周公作周礼
著六官存治体
大小戴註礼記
述聖言礼楽備

我が周公周礼を作り
六官を著して治体を存す
大小戴礼記を注し
聖言を述べて礼楽備はる

我が周公は、『周礼』を作り、六官を著録して、治国の綱領を残した。
○周公＝周公旦。周の武王の弟。周王朝の基礎を築いた。○六官＝家宰、司徒、宗伯、司馬、司寇、司空をいう。国の政治を担当する官。
戴徳と戴聖は『礼記』に注し、聖人の言葉を祖述して、礼楽制度がここに備わることとなった。○大小戴＝戴徳と戴聖。前漢の学者。戴徳は大戴と称される。その著『大戴礼』は一部が伝わっている。戴聖は戴徳の甥、小戴と称される。その著『礼記』が伝わっている。

曰国風曰雅頌
號四詩當諷詠
詩既亡春秋作
寓褒貶別善悪

曰はく国風曰はく雅頌
四詩と号す当に諷詠すべし
詩既に亡び春秋作る
褒貶を寓し善悪を別つ

国風、雅（大雅、小雅）頌は四詩と称す。吟詠すべきものである。○国風＝『詩経』中の地方の国々の民謡。○雅＝『詩経』の中の天子、諸侯の宴会に用いられた歌謡。大雅と小雅に分かれている。○頌＝『詩経』の中の宗廟で用いられた楽歌。
詩が滅ぶと、孔子は『春秋』を著し、そこに褒貶を寓し、善悪を区別した。

三傳者有公羊
有左氏有穀梁
経既明方讀子
撮其要記其事

三伝は公羊有り
左氏有り穀梁有り
経既に明らかにして方に子を読み
其の要を撮り其の事を記す

三伝とは『春秋公羊伝』『春秋左氏伝』『春秋穀梁伝』である。
六経が明らかになって、はじめて諸子を読み、その要点をとり、その内容を記憶するのである。

五子者有荀揚
文中子及老荘
経子通讀諸史
考世系知終始

五子は荀揚有り
文中子及び老荘
経子通じて諸史を読み
世系を考へ終始を知る

五子とは荀子、揚雄、文中子及び老子、荘子である。
○荀＝荀子。荀況。戦国時代の思想家。○揚＝揚雄。前漢末の学者、文章家。字は子雲。○文中子＝王通。隋代の思想家。○老荘＝老子と荘子。
諸子に通じたならば諸史を読み、歴代の系譜を考え、王朝の終始を知るのである。

自義農 至黄帝
號三皇 居上世
唐有虞號二帝
相揖遜 稱盛世

義農より黄帝に至るまで
三皇と号し上世に居り
唐有虞二帝と号す
相揖遜して盛世と称す

伏羲、神農、黄帝を三皇と呼ぶ。上古の世にいた。○義農＝伏羲と神農。いずれも伝説上の帝王。種々の文物制度を定めたといわれる。
堯と舜とは二帝と号する。二人はそれぞれ有徳の人、位を譲り、その治世を盛世と称する。○唐＝帝堯。姓は陶唐氏。○有虞＝帝舜。姓は有虞氏。○揖遜＝禅譲。堯は舜に位を譲り、舜は禹に位を譲った。

夏有禹 商有湯
周文武稱三王
夏傳子 家天下
四百載 遷夏社

夏の有禹 商に有湯
周の文武 三王と称す
夏は子に伝へ天下を家とす
四百載 夏の社を遷す

夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王は三王と称する。
夏は位を子孫に伝え、天下を家とした。四百年後、その国を殷にうつすこととなった。○夏＝禹王によって開かれたという王朝。○四百載＝夏王朝は十七代、約四百年存続したといわれる。○社＝社稷。国家。

湯伐夏国號商
六百載至紂亡
周武王始誅紂
八百載最長久

湯夏を伐ち国を商と号す
六百載　紂に至りて亡ぶ
周の武王始めて紂を誅し
八百載　最も長久なり

湯王は夏を伐ち、国を商と号し、六百年後、紂王に至って滅亡した。
○六百載＝殷王朝は三十代、六百年以上続いたとされる。
周の武王は始めて紂王を誅殺して、周王朝を開いた。周は八百年にわたって存続して、最も長く続いた王朝であった。

周轍東　王綱墜
逞干戈　尚遊説
始春秋　終戦國
五霸強　七雄出

周東に徹し　王綱墜ち
干戈を逞しくし　遊説を尚ぶ
春秋に始まり　戦国に終る
五霸強く　七雄出ず

周王朝が都を東の洛陽に遷すと、王権は衰え、やがて戦いをほしいままにし、遊説の士を尚ぶこととなった。　○周轍東＝前七七〇年、平王の時、都を河南省の洛水の沿岸に遷したことをいう。　○干戈＝戦争。
春秋時代から始まり戦国時代まで、五人の覇者がつぎつぎに威を振い、七つの強国が出現した。　○五霸＝斉の桓公、晉の文公、秦の穆公、楚の荘王、宋の襄公。
○七雄＝韓、魏、趙、斉、秦、楚、燕の七国。

嬴秦氏 始兼并
傳二世 楚漢争
高祖興 漢業建
至孝平 王莽簒

嬴秦氏 始めて兼ね并す
二世に伝へ 楚漢 争ふ
高祖興りて 漢業建ち
孝平至りて 王莽 簒ふ

秦王嬴政は、始めて天下を統一して、二世皇帝に伝えたが、間もなく楚と漢が覇権を争うこととなった。○嬴秦氏＝秦王嬴政は前二二一年天下を統一し、始皇帝となった。○二世＝秦の二世皇帝胡亥。○楚漢＝項羽と劉邦。漢の高祖が興起し、漢王朝を開いたが、平帝に至って王莽が簒奪した。○王莽＝紀元八年漢王朝を廃して新を建てたが、二三年、劉玄の兵に殺されて滅んだ。

光武興 為東漢
四百年 終於獻
魏蜀吳 争漢鼎
號三国 迄兩晋

光武興り 東漢と為す
四百年 献に終る
魏 蜀 吳 漢鼎を争ふ
三国と号し 両晋に迄ぶ

光武帝が興起し、王朝を開いた。これを東漢という。漢王朝は前漢あわせて四百年あまり続き、献帝にいたって滅んだ。○光武＝後漢の光武帝劉秀。○献＝献帝。劉協。後漢の最後の皇帝。
魏、蜀、吳の三国が漢の鼎を争った。この時代を三国時代と呼び、やがて西晋、東晋にいたる。○漢鼎＝漢王朝の帝位。

宋齊繼　梁陳承
為南朝　都金陵
北元魏　分東西
宇文周　與高齊

宋斉継ぎ梁陳承く
南朝と為し　金陵に都す
北元魏　東西を分かち
宇文周と　高斉と

宋斉梁陳が継承した。これを南朝といい、いずれも金陵に都した。　○宋斉＝宋王朝と斉王朝　○梁陳＝梁王朝と陳王朝　○金陵＝現在の江蘇省南京市。北朝は北魏に始まり、東魏と西魏に分かれた。さらに宇文氏の建てた北周が西魏にとってかわり、高氏の建てた北斉が東魏にとってかわった。　○元魏＝鮮卑族の拓跋珪が建てた王朝　○東西＝東魏と西魏。○宇文周＝宇文氏が建てた北周　○高斉＝高氏が建てた北斉。

迨至隋　一土宇
不再傳　失統緒
唐高祖起義師
除隋亂　創國基

隋に至るに迨び　土宇を一にす
再び伝はらず　統緒を失う
唐の高祖　義師を起こし
隋の乱を除き　国基を創む

隋に至って天下を統一したが、その天下は再び伝わらず、帝室の世系（血筋）は失なわれた。　○隋＝楊堅が中国を統一して建てた王朝。第二代煬帝が宇文化及に殺されて滅んだ。　○土宇＝天下。　○統緒＝帝室の世系。唐の高祖は義兵を起こし、隋末の混乱を除きさり、国の基を定めた。○唐高祖＝李淵。

二十傳 三百載
梁滅之國乃改
梁唐晉及漢周
稱五代皆有由

二十伝 三百載
梁之を滅ぼし国乃ち改まる
梁唐晉及び漢周
五代と称す皆由ること有り

唐は二十代伝わり、約三百年存続し、梁が滅ぼし国が改まった。 ○二十伝＝唐の皇帝は、高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗、玄宗、粛宗、代宗、徳宗、順宗、憲宗、穆宗、敬宗、文宗、武宗、宣宗、懿宗、僖宗、昭宗、哀帝の二十人。
後梁、後唐、後晉及び後漢、後周を五代と称する。その興亡にはそれぞれ皆理由がある。

炎宋興 受周禪
十八傳 南北混
十七史 全在茲
載治亂 知興衰

炎宋興り周の禅りを受け
十八伝 南北混ず
十七史 全く茲に在り
治乱を載せ興衰を知る

宋王朝が興り、後周の禅譲を受け、北宋、南宋併せて十八代伝わった。 ○炎宋＝北宋王朝。五行の炎徳をもって王となったとされ、炎宋とも呼ばれる。 ○十八伝＝北宋、南宋の皇帝は、太祖、太宗、真宗、仁宗、英宗、神宗、哲宗、徽宗、欽宗、高宗、孝宗、光宗、寧宗、理宗、度宗、恭宗、端宗、衛王の十八人。
十七史の大略は全てここに示されている。史書には治乱の過程が記されており、史書を読むことで興亡の所以を知ることができる。

讀史者考實録
通古今若親目
口而誦心而惟
朝於斯夕於斯

史を読む者は実録を考へ
古今に通じ親目するがごとし
口にて誦し心にして惟い
朝にも斯に於てし夕にも斯に於てす

史書を読む者は、事実に基づいて考察し、古今に通じること目の当りに見るようにするのである。
読書するには、口に唱え、思案し、朝も夜もつとめるのである。

昔仲尼師項橐
古聖賢尚勤学
趙中令讀魯論
彼既仕学且勤

昔仲尼は項橐を師とす
古の聖賢すら尚ほ勤め学ぶ
趙中令魯論を読む
彼既に仕へて学び且つ勤む

昔、仲尼（孔子の字）は項橐（魯の国の神童の名）を師として学んだという。古の聖賢ですら学に勤めたのである。
○趙中令＝中書令の趙普。宋建国の功臣。後に宰相となった人物。
中書令の趙普は常に論語を読んでいた。彼は仕えていながら学び且つ勤めたのである。

披蒲編削竹簡
彼無書且知勉
頭懸梁錐刺股
彼不教自勤苦

蒲編を披き竹簡を削る
彼書無きも且つ勉むるを知る
頭を梁に懸け錐を股に刺す
彼教へざれども自ら勤め苦む

漢の路溫舒は蒲を適当な長さに切って綴り合せた書物を開き、また漢の公孫弘は竹簡を削っては書籍を写して学に励んだという。彼らは書物がなかったが、努力して学ぶことを知っていたのである。
晋の孫敬は、眠気に襲われることを恐れ、縄を頭にかけ、それを梁につないで読書したという。また戦国時代の蘇秦は、眠くなると錐を股に刺して学び続けたという。彼らは教へられたのではなく、自ら勤め努力したのである。

如嚢螢如映雪
家雖貧学不輟
如負薪如挂角
身雖勞猶苦卓

如しくは螢を嚢にし如しくは雪に映す
家貧しと雖も学びて輟まず
如しくは薪を負ひ如しくは角に挂く
身は労すと雖も猶ほ卓きを苦む

晋の車胤は螢を嚢に入れ、その明りで読書し、また孫康は雪の明りで読書していたという。彼らは家が貧しかったが学んでやめることがなかった。○嚢螢＝晋の車胤は、貧しくて油を買うことができなかったので夏の夜には袋に数十匹の螢を入れて、その光で読書した。○映雪＝晋の孫康は、貧しくて油を買うことができず、冬は雪明かりで読書した。
漢の朱買臣は薪を負いながら読書し、隋の李密は牛に乗り、その角に書物を挂けつつ読書したという。彼ら苦労しながら衆から抜きん出ることにつとめたのである。

蘇老泉 二十七
始発憤 讀書籍
彼既老 猶悔遅
爾小生宜早思

蘇老泉は 二十七
始めて憤りを発し書籍を読む
彼既に老いて猶は遅きを悔ゆ
爾小生宜しく早く思うべし

蘇洵は二十七歳にして始めて発憤して書籍を読んだ。　○蘇老泉＝蘇洵、号は老泉。宋代の文章家。息子の蘇軾・蘇轍とともに三蘇と呼ばれる。唐宋八大家の一人。晩学で科挙に落ちて発奮し、読書にはげみ、後に名を成した。
彼は老いて、学問をするのが遅かったことを後悔した。お前たち後生の者は早く学問しようと思わなくてはいけない。

若梁灝 八十二
對大延 魁多士
彼既成 衆稱異
爾小生 宜立志

梁灝がごときは八十二にして
大廷に対し多士に魁たり
彼既に成り衆異なりと称す
爾小生 宜しく志を立つべし

例えば梁灝は八十二歳で、朝廷の外廷（天子の前で国政について尋ねられること）に立ってお答えし、多くの士人たちのかしらとなった。　○梁灝＝五代末から宋にかけての人。北宋の雍熙二年（九八五）、太宗の策問に答えて進士となった。時に八十二歳だった。
彼は老年にいたって名を成し、人々は皆人に優れて異っていると称えた。お前たち後生の者は、学問しようとする志を立てなくてはいけない。

瑩八歲能咏詩
泌七歲能賦碁
彼穎悟人稱奇
爾幼学當效之

瑩は八歲にして能く詩を詠じ
泌は七歲にして能く碁を賦す
彼は穎悟にして人奇と称す
爾幼学当に之に效うべし

祖瑩は八歲で詩を詠じることができ、李泌は七歲で碁の詩を賦した。
○瑩＝北魏の祖瑩。字は元珍。八歲で『詩経』や『書経』を朗唱した。学問を好み、両親が心配して止めるほどだったという。○泌＝唐の李泌。字は長源。玄宗皇帝に召され、「方」、「円」、「動」、「静」を読み込んだ詩を作って称賛された。
彼らは若くして聡明であり、人々はその優れていることを称えた。お前たち幼くして学ぶ者は彼らに倣わなくてはいけない。

蔡文姫能辨琴
謝道韞能咏吟
彼女子旦聰敏
爾男子當自警

蔡文姫は能く琴を弁じ
謝道韞は能く詠吟す
彼女子にして且つ聡敏
爾男子当に自ら警むべし

蔡文姫は琴のどの弦が切れたかを聞き分けることができ、また謝道韞は詩賦を作ることができた
彼らは女性であって聡明であった。お前たち男子は自らいましめなくてはいけない。

唐劉晏方七歳
舉神童作正字
彼雖幼身已仕
爾幼学勉而致
有為者亦若是

唐の劉晏方に七歳
神童に挙げられ正字と作る
彼は幼と雖も身已に仕ふ
爾幼学勉めて致せ
為すこと有る者は亦た是のごとし

唐の劉晏は七歳の時、玄宗皇帝に頌を奉って太子正字の官を賜り、神童と称された。唐を代表する財政家。安史の乱後の国家財政の立て直しに力を尽くした。彼は八歳の時すでに図書の校正などを司る官となり仕えていた。お前たち幼くして学ぶ者は、努力して学問をせよ。有為の人物は皆このようである。

犬守夜雞司晨
苟不学曷為人
蠶吐絲蜂釀蜜
人不学不如物

犬は夜を守り鶏は晨を司る
苟くも学ばずんば曷ぞ人と為さん
蚕は糸を吐き蜂は蜜を醸す
人学ばずんば物に如かず

犬は夜を守り、鶏は夜明けを告げ、それぞれ人の役に立っている。もしも人が学ばなければ、どうして人と称することができよう。
蚕は糸を吐いて絹をもたらし、蜂は蜜を醸す。人が学ばなければ、物にも及ばないのである。

幼而学壮而行
上致君下澤民
揚名聲顯父母
光於前裕於後

幼にして学び壮にして行ふ
上は君を致し下は民を沢す
名声を揚げ父母を顕し
前を光し後を裕かにせよ

幼くして学び、壮年になり官につきその道を行い、上は国のために力を尽くし、下は黎民に幸せをもたらすのである。そして名声を上げ、父母を顕彰し、先祖をかがやかし、子孫をゆたかにせよ。

○致君＝主君を堯や舜のような聖天子にすること

人遺子金滿籯
我教子惟一経
勤有功戲無益
戒之哉宜勉力

人は子に遺すに金籯に滿つ
我は子に教ふるに惟だ一経
勤むれば功有り、戯るれば益無し
之を戒めよや宜しく勉め力むべし

人は子に籠一杯の黄金を遺すであろうが、私は子に教えるのは、ただ一冊の経書だけである。

○籯＝かご。○一経＝一冊の経典（三字経を指す。

努力して学べば功業があるであろう。戯れ怠ればなんの益も無いであろう。つつしみなさい。しっかり努力をかさねることにしましょう。

参考文献

「三字経」　大修館書店ホームページ「漢字文化資料館」

訓読・通釈は加藤敏先生より抜粋

編集後記

三字経とは、中国宋代に編纂され江戸時代に多くの寺子屋で教本とされていました。勉強することを身につけること、社会に役立つ仕事ができるようにと人間学を説いた書物。三文字三文字の対句で一章、しかもリズミカルに暗唱できるなど素読に最適であり、古典を学ぶ上で貴重な書物です。この記念誌は、明治初期まで寺子屋（玉松堂）を開塾していた子孫植田次郎先生から田代氏に贈呈された「和綴じ本」をもとに素読の教材として復元されました。田代氏の遺稿において、漢文は王伯厚先生原文を、読み方・和訳はできる限り字音字訓を現代文にと苦心されたお姿が目に浮かびます。田代氏の偉業を讃え後世に伝えたく、進脩塾三十周年記念誌として発刊することができました。

記念誌発刊に際しまして、郷友会松平会長はじめ会員の皆様そして特に三十年間進脩塾を公私共に支えて頂きました皆様には心より深甚なる感謝の意を申し上げます。

発行責任者　川田隆生

進脩塾創設三十周年記念
素読のすすめ　王伯厚先生編　三字経
令和三年六月五日　発行
著者　田代敬二
発行者　松平忠昌
発行責任者　川田隆生
発行所　公益財団法人　忍郷友会
〒三六一―〇〇七三
行田市行田五番十号　スリーハートビル三階
〇四八（五五六）九〇〇〇
印刷所製本　三共印刷株式会社